

## 読書について考える

校長 相川 保 敏

正門で朝の挨拶をしていると、小脇に本を抱え登校する子どもたちを見かけます。中には、本のページに指を挟んでしおり代わりにしている子も見られます。



相山小学校の子どもたちの読書量を学校図書館貸出冊数から見てみたいと思います。2023年度の貸出冊数は、合計6,421冊です。2022年度は6,112冊でしたので5.1%増となっています。記録が残る2018年度は4,685冊でしたので、6年間で37.1%増と大幅に増えています。貸出冊数を学年比較すると、一番多い学年は1年生で2,526冊、一番少ない学年は6年生で297冊でした。学級の相小50選や個人所有の本は含まれていませんので実際にはもう少し増えるかもしれませんが、学年が進むにつれて貸出冊数が減る傾向が毎年見られます。学年が進むにつれて学習内容が難しくなることや忙しくなることが影響を与えているのではないかと学校司書の今井さんは推察しています。

先日9月17日に文化庁が2023年度の「国語に関する世論調査」(調査対象16歳以上、有効回答3559人)を公表しました。1カ月に読む本(電子書籍は含み、漫画・雑誌は除く)の冊数を尋ねる質問では、下の表にあるように「1冊も読まない」と回答した人は62.6%で、前回2018年度の調査の47.3%から15.3ポイントも増えています。一方で、本を読まないと回答した人に「SNSやインターネット上の記事などの情報を読む機会がどのくらいあるか」を尋ねたところ、75.3%が「ほぼ毎日ある」と回答しました。また、以前に比べて「読書量は減っている」と答えた人に読書量が減っている理由を尋ねたところ、「情報機器(スマートフォン、タブレット、ゲーム機等)で時間が取

られる」が43.6%で最も高く、次いで「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」が38.9%でした。文化庁は読書離れが進んだ要因を「スマートフォンやタブレットは18年度の調査時点ですでに普及していたが利用できるアプリやサービスが多様化して利用頻度が高まり、読書の時間にとって代わっているため」と推測しています。本校で学年が進むにつれて、貸出冊数が減っている背景には、単に忙しいだけでなく情報機器の利用の頻度が高まっていることも考えられます。文化庁は、「読書は情報収集ツールとして効果的であり、思考力を深めて人格形成をする上でも利点がある。国語力を養う活動の一つでもあり、本に触れる機会を確保するのは重要だ」と言っています。

幸いにも、本校の子どもたちの貸出冊数は全体として増加してるとともに、各家庭の読書環境は全国的に見ても整っていると言えます。全国学習状況調査によれば、家庭に本(雑誌、新聞、教科書は除く)が101冊以上あると答えている児童の割合は全国32.2%に対し、本校52.0%と大変高くなっています。特に501冊以上の割合は、全国4.8%、本校10.7%と倍以上高くなっています。同じように新聞をほぼ毎日読んでいると回答している児童の割合は、全国3.8%に対し、本校は10.7%とこれも2倍以上高くなっています。本に触れ文字に触れる環境がより整っていると言えます。

文化庁調査で、以前に比べて「読書量は増えている」と答えた人に読書量が増えている理由を尋ねたところ最も高かったのが「時間に余裕ができた」44.3%でした。やはり、読書をするには時間が必要なようです。「読書の秋」、ご家族でスマホを置いてゆったりと読書する時間を作ってみてはいかがでしょうか。

さて、10月の月目標は、「協力のしかたを考えよう」です。協力するにあたっては「何のために」「何をするか」を自分で考え実行することが大切です。学校では発達段階に応じて、友達、学級、学校、地域社会、国、世界と対象を広げていきます。ご家庭でも主体性、実践力が高まるように、まずは家族の一員としての「協力」を考え、実行していただけるとありがたいです。

1カ月に読む本の冊数

年度	読まない	1、2冊	3、4冊	5、6冊	7冊以上	無回答・わからない
2008	46.1	36.1	10.7	3.3	3.3	0.5
2013	47.5	34.5	10.9	3.4	3.6	0.2
2018	47.3	37.6	8.6	3.2	3.2	0.2
2023	62.6	27.6	6	1.5	1.8	0.5

文化庁国語世論調査より (%)